

なにもないまままで

原田敬大

振り返るのはいつだって、
すべてが溶けたあとのことで、
感情だけがきれいなまま
私には何も残りません。
それは、
錆びついた遊園地のように
今日も誰もいないまま
いつまでも揺られているでしょう。

一人だけの手紙を探しに
今日も散歩に出かけます。
春を待っている私は、
みずみずしく乾燥した息を吸って、
きつといい一日だったと
明日を振り返るのです。

そんな、触ることのできない
溶けた感情だけを
溢れるまで大切に積みかさねて
きつと水平線だけが残るでしょう。
歩いて歩いて歩いて海にいました。
そこは私じゃない
誰かしかいなくなつて、

だから私は、

誰も見たことのない

そんなありふれた

写真集を作ることにしました。

長年連れ添った友人の脳みそから

埃を被った私を取り出して、

○△□、色とりどりの模型で

空白を埋めていこう。

雪が降り始めた頃

すでに私は余白を失っていて、

生まれて初めて

新しい頁を買いに出かけられるのです。